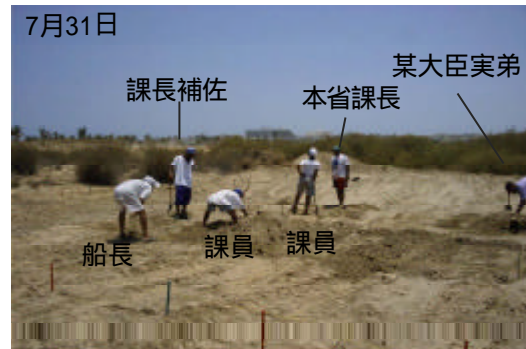


# AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD  
 国際耕種株式会社  
 〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403  
 TEL/FAX: 042-725-6250 Email: aai@sk9.so-net.ne.jp

## シンドバッドの国から～オマーン人は働き者？～

去る4月にオマーンのマスカットに赴任してから、早半年が過ぎようとしています。6月頃の焼け付くような暑さとかわって、朝夕は心地よいほどの気候になってきました(といっても日中は35～36度ありますが)。オマーン国は湾岸産油諸国の中では原油埋蔵量の残り少ない国の一つです。そういった事情もあって、国王のスルタン・カブースも「石油のみに頼ってはいならない」と、産業の多様化推進には極めて積極的です。サウジアラビアや UAE 等の近隣の産油国と比べて、ナショナルの人口比率が高く(オマーンナショナル170万人、外国人60万人)かつ国民1人当たりのGDPは約4分の1であり、「ペイが多少悪くとも働かなくてはならない」との危機感は非常に高いと言えます。オマーナイゼーションも「高給の外国人より自国民の雇用を」という文脈から、まずお役所から進められており、政府関係機関ではすでに90%以上の職員がナショナルになっているとのこと。一方、民間企業ではオマーナイゼーションは遅々として進まず、せいぜい20～30%程度でしかないとのこと。一説には、主たる労働者であるインド人を対象とした民間企業の給与水準がオマーン人にとっては低すぎるからだ、との指摘もありますが、当たらずといえども遠からず、であると思います。



枕が長くなりましたが、マスカット周辺のオマーン人はかなり働き者と言えます。右の写真は、極めて暑い真夏の作業風景です。マングローブの苗畑を手作業で作っているところです。彼らにしてみれば3Kの仕事なのでしょうが、どんな仕事もオマーン人がやらねば、と考えているようです。一方、南部のおおきな都市であるゾファール州のサララでは、そんな仕事はオマーン人がすべき仕事ではない、というのがいまだ主流のようです。課長補佐がかぶっているのがクンマ(オマーン帽)で、この上にマサルという巻き布を巻き、ディシュダシャーを着れば正装になります。この巻き布がサウジや他のアラブ諸国のように長くなく短いので、きりっとした印象を受けます。千夜一夜物語で出てくるシンドバッドはスールカソハールだかの出身だそうですが、船乗りにはだらんとしたかぶり布よりも作業しやすかった事でしょう。交通安全係のおじいちゃんも「背に腹はかえられんワイ」とばかりに、炎天下で頑張っています。物価は思ったより高いとの印象があり、ほぼUAEと同じか少し高いぐらいです。恐らく、ものがドバイから運ばれて来る分高くなるのでしょう。給与は安いわ(お役所では大学新卒で約12万円)物価は高いわ、でオマーン人庶民の暮らしは決して楽では無いことでしょう。しかし、全ての人とは言いませんが、何かを学んでやろうという意識は高く、自腹でも資格を取って、キャリアアップを図ろうとしているような人間もいます。労働も祈りの一部と考えている彼らの姿にはかえって教えられること大の毎日です。ジョーク好きで大らかに笑っている彼らに幸多かれ！  
 (在オマーン：東海林)

